

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02717

研究課題名（和文）茨城県南東部地域における特徴的方言とその変容に及ぼす移住者増に関する研究

研究課題名（英文）A study on the characteristic dialect of the southeastern area of Ibaraki and its changes due to increase of newcomers

研究代表者

杉本 妙子（SUGIMOTO, Taeko）

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30206429

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず、茨城県南東部地域の方言を把握するための現地調査とその記述を行った。次に、方言変容の様相を明らかにするために、神栖市の小学生とその親・祖父母世代を対象に多人数調査を行った。多人数調査の結果、語彙・文法等の方言の使用・認知が小学生では急速に減少していることがわかった。しかし、親・祖父母世代で「使う」の回答が多かった語彙・文法項目では小学生でも「使う」の回答が見られ、一定程度の方言の継承が認められた。一方、方言意識項目では、「方言を残したほうがいい」の回答が親・祖父母世代の2割強に対して小学生は7割近くであった。これらの研究成果の一部については、報告書にまとめて公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

茨城県南東部は、千葉県方言に近い方言と茨城県中央方言に共通する方言が観察されるという特色ある地域である。当該地域は、古くから移住者が多く、近年も周辺地域から子育て世代が多数移住している地域である。先行研究が少ない茨城方言の中でも特色ある当該地域の方言について、研究の基礎となる記述的研究をすることは学術的に必要である。また、移住者が多い当該地域方言の変化の様相を、多人数の多世代の方言の状況から明らかにすることには、学術的意義がある。そして、地域文化でありながらマイナスイメージの強い茨城方言について、伝統方言の記述とともに方言の変化の現状を明らかにすることには、社会的な意義もある。

研究成果の概要（英文）：In this research, at first, we did fieldwork at the southeastern area of Ibaraki and described the dialect. Then, in order to show the changes of the dialect, we investigated large number of people in Kamisu consisting of elementary school students and their parents and grandparents. As a result, we found that the use and recognition of such as vocabulary and grammar are rapidly decreasing among elementary school students. However, the dialect is inherited to some extent, because elementary school students also answered "use" to vocabulary and grammar items to which many parents and grandparents answered "use." On the other hand, regarding questions about the attitude to Ibaraki dialect, nearly 70% of elementary school students responded that they should keep their dialect, despite that over 20% of their parents and grandparents responded so. We published some of the results of this research as a report.

研究分野：日本語学、社会言語学

キーワード：茨城方言 方言の記述的研究 方言基礎語彙 茨城方言アクセント 方言の変化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 茨城県の大部分の地域は無アクセント方言だが、茨城県南東部に位置する神栖市の一部地域では東京式アクセントであるという、茨城方言としては特色ある方言の地域である。また、本研究課題で注目する神栖市は、古くから移住者が多く、近年は子育て中の若い世代の移住も多く、この点でも特色ある地域となっており、当該地域の方言の現状は社会言語学的に明らかにすべきだと考えられる。

(2) 研究代表者は、東日本大震災以降、茨城県南東部を含む茨城県各地で方言の現地調査を行っているが、急速に方言が使われなくなってきていると感じている。しかも茨城方言の先行研究は少ないことから、早急に方言の記述的研究をする必要がある。本研究課題が注目する茨城県南東部地域においても、社会言語学的な調査に先立って、方言の記述的研究が必要である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、茨城県南東部地域における方言変容の様相を、主に移住者の増加と関連付けて動態的に解明することである。茨城県南東部地域は、古くから千葉県からの移住者が多く、その後、鹿島臨海工業地帯開発に伴う移住者が、近年は周辺地域から若い世代の移住者が多く、これまで継承されてきた方言の急速な変化・衰退が推測される地域である。そこで、継承されてきた方言の現状とその変化の様相、及び方言意識について、多世代に対する大規模調査によって明らかにする。

(2) 本研究の第二の目的は、当該地域の方言の詳細を現地調査に基づいて記述することである。語彙・文法を中心に、高年齢層を対象に調査して伝統的な方言を記述する。また、当該地域内に見られる顕著な方言の特徴である東京式アクセントについて、当該地域内の無アクセント地域内で若年層を対象に調査し、アクセントの現状を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 第一の目的について、方言の使用・認知度と方言に関する意識調査は、神栖市内の複数の小学校の協力を得て、小学生とその親・祖父母世代を対象に多人数に対して自記式のアンケート形式で調査する。協力小学校は、神栖市の旧神栖地域の中心地(茨城県中央方言と共通する陸ことばの地域)、旧神栖地域内の浜寄りの地域(千葉県方言に近い浜ことばの地域)、千葉県銚子市の方言との共通性が高い旧波崎地域にある3つの小学校である。方言使用・認知度調査では、先行して行う記述的研究の結果や先行研究をもとに調査項目を選定して実施する。方言意識調査は、方言と共通語に対する好悪・志向や使用等に関する調査項目によって行う。これらの調査結果については、先行研究とともに地域史・地域の統計資料等も使用しながら分析する。

(2) 方言の記述的研究と談話研究では、現地において録音機器を使用した対面形式の調査を行う。1回の調査に1~3名の高年齢層の協力者に対して、事前に準備した語彙・文法に関する調査票を用いて調査する。アクセントについても、東京式アクセントが確認された場合には、記述に反映させる。併せて、当該地域の方言や民俗等についての自由会話の談話収集も行う。若年層(上記(1)の旧神栖中心地の小学校の小学生若干名)に対するアクセント調査については、読み上げ式の調査票を中心に録音機器を使用した対面形式の調査を行う。併せて、聞き取り調査によるアクセント型知覚の有無も確認する。

4. 研究成果

(1) 茨城県南東部地域の方言の記述について

茨城県南東部地域にある、神栖市、潮来市、行方市において、各地の生え抜きの高齢者層を対象に現地調査を行った。神栖市では平成29・30年度に、潮来市では平成30年度に、行方市では令和元年度に、それぞれ語彙を中心に現地調査を行い、その記述を令和2~4年度に行った。調査内容は、神栖市では基礎語彙に基づいて「人体」「食」分野の語彙調査を、潮来市では俚語集との比較のための調査を、行方市では基礎語彙をもとにした簡易版語彙リスト(18分野742項目)での調査を行った。

このうち、令和4年度に報告書で公表した神栖市の「人体」分野の204項目について説明する。調査対象は、調査地域の生え抜きの80代男性2名である。調査は、基礎語彙項目に若干の独自項目を加えた252項目で行い、報告書では204項目328語(見出しとした句を含む)にまとめて報告した。各語は、語義、例文(多義語を中心に)を示すとともに、見出し語形(単語)にはアクセントを表示した。

(2) 神栖市で実施した多人数調査について

語彙調査と先行研究をもとに多人数調査票(語彙、文法、発音、方言意識の計30項目)及びアクセント調査票(のべ273語・文)を作成し、令和4年度に調査を実施した。多人数調査はアンケート形式で行い、神栖市の3小学校5・6年生計306名(一部の項目は278名)とその家族213名から有効回答を得た。調査のうちここでは語彙・文法・発音項目の結果について、小学生の結果と親・祖父母世代(家族)に分けて概要を述べる。

調査の結果、小学生では語彙の「イガイ・エガイ(大きい)」「チク・チグ(嘘)」「マギメ(眉毛)」「ヤマゲ(眉毛)」「オドメ(赤ん坊)」と「(生き物名)+メ」では「使う」の回答が3校とも5%以下と少なく、「聞いたことはないし意味もわからない」(以下では、「意味もわからない」)は7割近く~9割以上と多く、これらの語は小学生世代では既にほとんど使用せず、意味もわからないということがわかった。小学生で「使う」の回答が半数以上と多かったのは「アオナジミ(青あざ)」1語のみで、旧神栖地区の2校で約65%、旧波崎の1校は約8割で、「意味もわからない」は旧神栖の2校は約13%、旧波崎の1校は約わずか4.3%だった。次いで「使う」の回答が多かったのは「シミジミ(しっかりしている様子)」だが、旧神栖の2校は25%前後、旧波崎の1校は約35%にとどまった。そのほか、「アオタン(青あざ)」「ヒヤス(水に浸す)」も「使う」が2割近くの学校が多く、一定程度の使用が認められた。文法項目で「使う」の回答が多かったのは「動詞+ペ・ペ(推量・意志)」と「力変動詞の一段化(「来る」を「キナイ・キネー」と言うこと)」だったが、2項目とも旧神栖地区の2校では15%以下、旧波崎地区の1校では25%強(「以前は使った」を含めると約35%)にとどまった。調査した助詞の項目では、「バ(対象)」「ゴド(対象)」「ゲ(受け手)」について、「使う」の回答は3校いずれも1割未満と少なく、「意味もわからない」は5割~8割以上で他の文法項目と比べてかなり多いという傾向だった。発音の項目では、東北方言的特徴の「語中のカ・タ行の濁音化」について、「言う/ときどき言う/語によっては言う」(以下では、「言う」類)の合計が3校で約15~20%だったが、「ジ・ビ・ズ・ブの清音化」は3校いずれでも濁音化よりも少なく約5~15%で両項目の結果に開きが見られた。発音項目で「言う」類の回答が多かったのは、「連母音の融合」と「活用語尾のルの促音化」で、3校とも35%~5割近くだったが、どちらの項目も旧神栖の2校よりも旧波崎の1校のほうが「言う」類の回答が多かった。小学生世代の結果を全体的に見ると、語彙と文法項目では使用が少ないものが多く、発音の項目は「言う」類の回答が語彙・文法と比べると多かった。学校間を比べると、語彙では最も「使う」の回答が多かった学校が項目によって異なっていたが、全ての文法項目と1項目を除く発音項目では旧波崎の小学生は旧神栖の2校の小学生よりも使用が多く、市内に方言使用の地域差があることがわかった。

一方、親・祖父母世代(以下では「家族」とする)では、語彙・文法・発音のほとんどの項目において小学生より「使う」「言う」の回答が多かった。語彙では、「アオナジミ」が「使う」の回答が最も多く6割~9割だった。次いで「シミジミ」(2校で5割以上)と「ヒヤス」(1校で5割以上)が「使う」の回答が多く、「アオタン」_ル、「イジヤゲル類(腹が立つ、等)」_ル、「ゴジャッペ類(いい加減、等)」がそれに次ぐ結果だった。これら「使う」が多かった語彙では、「アオタン」以外は旧波崎1校の家族の回答が旧神栖の2校の家族よりも多かった。「使う」の回答が少なく、「意味もわからない」の回答が多かったのは、「オドメ」「マギメ」「ヤマゲ」で、いずれも「使う」は1割以下で、「意味もわからない」は8割~100%だった。それに次いだのが「ウルカス(水に浸す)」_ル、さらに「チグ・チク」だった。これら「使う」の回答が少なく「意味もわからない」が多かった項目では、「使う」の回答の多い語のような一定の地域差の傾向は見られなかった。文法では、「動詞+ペ・ペ」で「使う」が最も多く、旧神栖2校の家族は4割前後、旧波崎は7割弱、「意味もわからない」はいずれも5%以下だった。小学生の親・祖父母世代は、動詞に下接する「ペ・ペ」は、使うか、使わなくても聞いたことがあって意味はわかるという状況であると考えられる。「形容詞+~ペ・ペ」が、これに次ぐ。「ペ・ペ」ほどではないが「使う」の回答が多かったのは、「力変動詞の一段化」「サ変動詞の一段化(「すれば」を「シレバ・シロバ」ということ)」「サ(方向・場所)」で、それに「ラセル(使役)」と「バ」が続いた。それ以外の「ゴト」と「ゲ」は「使う」が数%~10%強で、文法項目での使用が最も少なかった。文法項目全体では、全ての項目において旧波崎1校の家族が「使う」が最も多く、項目によっては旧神栖の2校の「使う」の倍ほどであった。発音では、「動詞語尾ルの促音化」で「言う」類が最も多く、旧波崎1校の家族は約75%、旧神栖2校の家族は約46%だった。次に多かったのは「カ・タ行の濁音化」で、旧波崎が6割強、旧神栖2校は3割前後、その次が「連母音の融合」で旧波崎が約46%で旧神栖2校が25%前後だった。最も「言う」類が少なかったのは「ジ・ビ・ズ・ブの清音化」で、旧波崎が約33%、旧神栖2校が約25%と約17%だった。発音項目全体では、「言う」類の回答が多い項目・地点では「意味もわからない」の回答が少なく、「言う」類の回答が少ない項目・地点では「意味もわからない」の回答が多かった。また、文法同様、すべての発音項目で旧波崎1校の家族が旧神栖2校の家族よりも「言う」類が多かった。

(3) 神栖市で実施した多人数調査について

多人数調査の結果のうち、最も有効回答数の多かった旧神栖の1校の小学生と親・祖父母世代の結果を比較して述べる。方言意識及びアクセント調査についても言及する。

小学生世代と親・祖父母世代とを比較すると、語彙、文法、発音の多くの項目で、方言形の使

用が多い項目が少なくなかった親・祖父母世代に対して、小学生ではほとんどの項目で低い値となっており、急速に方言形の使用が減少していることがわかった。しかし、親・祖父母世代で「使う」の回答が多かったいくつかの項目（「アオナジミ」「イジヤゲル」や「動詞+ペ・ベ」など）では小学生でも「使う」の回答が多い項目となっていて、一定程度の方言の継承が認められると言える。一方、方言意識では「方言を残したほうがいい」について、親・祖父母世代の2割強に対して小学生は7割近くという多数が「残したほうがいい」と回答しており、方言に対する意識に大きな違いが見られた。

アクセント調査は小学生4名を対象に読み上げ式・聞き取り式で行った。その結果、多くの語は東京式アクセントで発音され、聞き取り調査でも型知覚があることも確認されたが、東京式アクセントと異なるアクセントや、調査語によっては調査協力者による揺れも観察された。

（4）研究成果の総括と今後の課題

本研究課題の研究期間は、2年間の期間延長を含めた平成28～令和4年度である。この間、新型コロナウイルス感染症によって現地調査等、研究を進めるのが困難な時期もあったが、最終年度の令和4年度には、本研究課題を総括し、報告書（A4判118頁）をまとめることができた。この報告書では、研究の概要、「人体」基礎語彙の記述、多人数調査の結果等を報告したが、取り組みの全てを報告できていないので、未報告の記述や多人数調査の分析等を進め、それらを論文等で公開していくことが、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 杉本 妙子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 茨城大学	5. 総ページ数 118
3. 書名 茨城県南東部地域における特徴的方言とその変容に及ぼす移住者増に関する研究（科研費報告書）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------